

佐賀さんの説明に、毛利長官はうなずいて聞いている。私はアンケートをやりながら会ったさまざまな人を想い浮かべた。中でも一番深刻なのはお茶葉屋さんだった。いくら良いお茶を売っても、まづいいといわれて困るといつてこぼしていた。

他の土地から来た人は、二、三か月くらいが一番こたえるらしいけれど、半年もたつと慣れてしまつて、あまり感じなくなつてしまつてという話を聞いたこともある。人の慣れというものは、おそろしいものである。

ジュースしか飲まないという新婚夫婦がいてびっくりしたり、台所に一升ビンをそれこそ何本となく並べて、ろ過装置でこした水をあと二回くらい煮沸して、それをさまして飲んでいるという、ごていねいな人にもお目にかかった。

困るのは子どもたちである。家で飲ませる生水は、大抵煮沸させてみたり、浄水器でこしてみたり、苦心して何らかの手をうつてあるけれども、学校で飲む水は、そうはいかない。しかも休み時間など、一度に大量の水が出るせいか、その塩素の匂いが特別なのだと、子どもはいう。夏になると塩素の匂いの外に、カビ臭いといおうか、くさりくさいといおうか、ともかく表現に苦しむようないずれぬ匂いが強引にはいりこんでしまつて、

一度味わつたら忘れられないような強烈さでせまってくる。学校へ水筒を持つていつて、いいかどうか、生徒会で何回となく提案があつて、その都度、たち消えになつてしまつらしい。

うちの子どもも、臭いからいやだといつて学校の水を決して飲まない。運動したあとなど、子どものことだから、かなりのどがかわくにちがいないのに我まんして飲まないで犬みたいに舌を出して、ハアハアいいながら帰つて来る。私は最初、それに気がつかないので、てつきり犬の真似をしているのだと思つたくらいである。

署名は、駅前の路上に机を置いて日曜のたびに通行人に呼びかけたものであるけれど、主婦の人たちがびつくりするほど積極的に協力してくれた。主婦の人たちはそれだけ飲み水についての不安を強く感じているせいだろうか。

「この請願書に署名したのは土浦市内の人ばかりですか。」
「いえ、そうとも限りません。その周辺の人たちもいますし、東京都内の人も千八百人いるはずです。」

「その人たちは、おそかれ早かれ筑波の研究学園都市に移住してくる予定の人たちです。土浦に来て水を飲んでみて、心配して、署名に協力してくれたのです。」